

児童用英語テキストにおける動詞の項構造と文型*

長谷部 郁子

筑波大学

本論では、複数の児童用英語教材における動詞の出現割合について調査し、理論言語学の立場から、語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure (LCS)) や統語構造といった道具立てを用い、教材に現れる動詞の性質について考察し、提言を行う。具体的には、児童用英語教材には、活動動詞が多く現れ、かつ第1文型、第2文型、第3文型が多用されていることを指摘し、こうした動詞のLCSはACTやSTATEのみから成る単純なものであり、教材内に出現する表現の統語構造は、多くの場合、単一のVPのみから成る構造に限られることを議論する。最後に、外国語活動のタスクなどを考案の際に、動詞の意味や動詞が現れる文の構造の単純さなどを考慮する必要があると結論づける。

1. はじめに

2011年から公立小学校の5、6年生の授業において、英語活動を中心とした外国語活動が導入されている。小学校英語や児童英語における語彙分析のリストに関しては、石川 2006による単語リスト (KUBEE 1850) や中條他 2006による単語リスト、長谷川他 2010によるKUISリストなどがあるが、その他、児童英語における語彙の中で特に『英語ノート (試

* 本論文は、日本英語学会第28回大会ワークショップ「英語学から見た児童英語」(企画者 神谷昇)における口頭発表(2010年11月13日 於日本大学文理学部キャンパス)を基に加筆・修正したものである。本論の草稿に貴重なコメントを下された長谷川信子先生、神谷昇氏、町田なほみ氏には厚く御礼申し上げます。また、発表の際に参加者の方々から有益なコメントを頂いたことに感謝申し上げます。言うまでもなく、本稿の誤りは筆者の責任である。なお、本稿の調査は日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究(C)『早期英語教育教材に見る語彙と文法の特徴：真に「英語が使える日本人」育成に向けて』(研究代表者：神谷 昇)の助成を受けて行われたものである。

作版)』や『英語ノート (正式版)』に現れる動詞の意味や機能に着目した分析に、神谷他 2009、神谷他 2010 などがある。

以上のことを踏まえ、本論では、次の3点について調査し、理論言語学的観点から分析する。第一に、児童用英語テキストにはどのような項構造を持つ動詞が含まれているかということ明らかにし、第二に、児童用英語教材にはどのような意味タイプの動詞が含まれるのかということ調査する。第三に、それらの動詞によって実現される文型はどのようなものかということについても分析する。なお、本論では、動詞が現れることのできる統語的な環境を表すものとして文型という用語を用いる。

本発表の主張と目的は以下の3つである。まず、児童用英語教材に含まれる動詞には、どのような語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure (LCS)) が与えられるのかを分析し、LCSにより動詞の項構造を明らかにする。次に、これらの動詞がどのような文型に現れるのかを調査し、こうした文型が共有する統語構造について議論する。さらに、上記の分析結果や議論を踏まえ、理論言語学の立場から児童英語において導入される動詞や文型について提言を行う。

児童英語教材に出現する動詞や文型に関する具体的な調査結果を提示する前に、2節では本分析で用いる理論的な枠組みについて概観する。3節では児童英語教材にどのような意味タイプの動詞が出現し、どのような文型が多く用いられるのかを明らかにする。これらの結果を踏まえ、4節では理論的な帰結を述べる。5節は本論の結論である。

2. 動詞の語彙意味構造と動詞句の統語構造

本節では、児童用英語教材に出現する動詞の意味と動詞が現れることのできる統語環境について論じる。本論では、動詞の意味タイプの分類は、Vendler 1967 の4分類に従う。具体

的な分類は、以下の表を参照されたい。

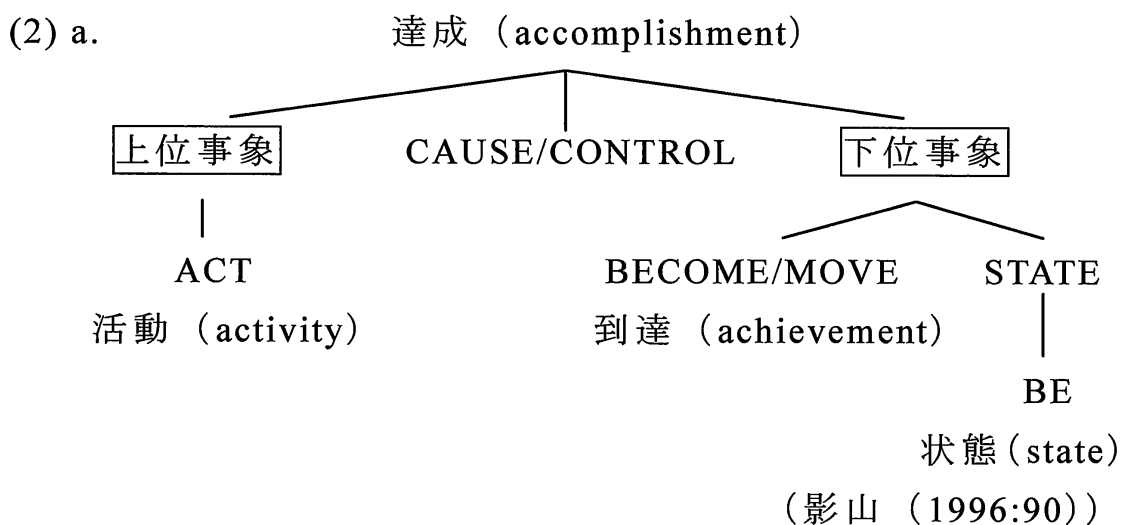
表 1 (神谷他 (2009:134))

動詞のタイプ	文型	例
活動動詞	SV、SVO	swim、study
達成動詞	SVO	make、break
到達動詞	SV	go、come、grow
状態動詞	SVC、SVO	be、have、want

- (1) a. John swims. (活動動詞)
 b. John broke the vase. (達成動詞)
 c. John went home. (到達動詞)
 d. He is a student. (状態動詞)

なお、児童用英語教材においては、Vendler の 4 分類における到達動詞は第 1 文型にしか現れず、達成動詞はほぼ第 3 文型にしか現れないが、活動動詞は第 1 文型と第 3 文型の両方に現れ、状態動詞は第 2 文型と第 3 文型の両方に現れることが可能である。

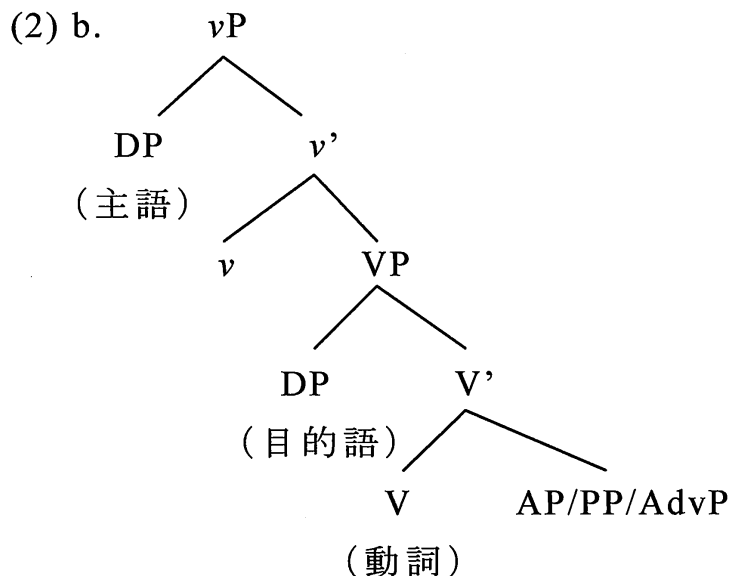
また、本論では、以下のような影山 1996 の枠組みに基づいた LCS 表記を用いる。

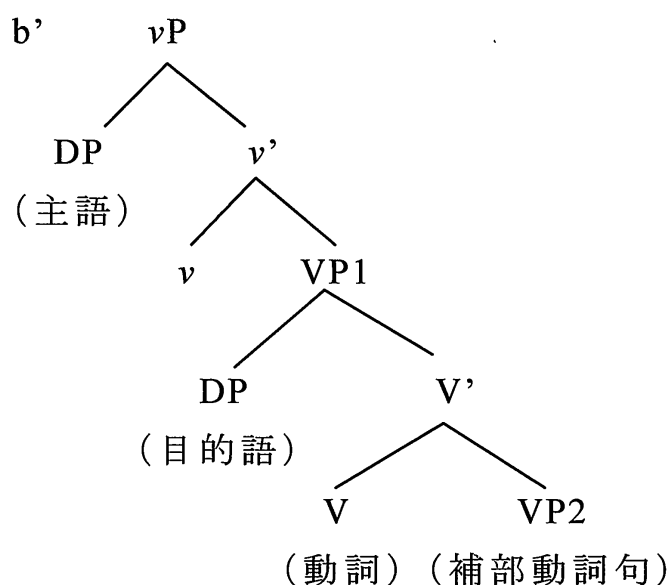


活動動詞の LCS は、主に、主語の意図的な行為を表す上位事

象 ACT を、到達動詞の LCS は主語の意図的でない変化や移動などを表す下位事象 BECOME や MOVE をそれぞれ含む。また、状態動詞の LCS には主語の状態を表す下位事象 BE が含まれる。上位事象と下位事象が CONTROL や CAUSE といった使役述語によって結び付けられると、主語の意図的な行為によって何かの状態変化が引き起こされるという1つのまとまった使役事象を表す。この大きな使役事象全体の LCS を持つのは達成動詞である。

さらに、以下では、第4文型の例や第5文型の例の多くが(2b)のような動詞の補部に AP や PP、AdvP が現れる統語構造を共有する一方、一部の第5文型の例は、(2b')のような動詞の補部に新たな別の VP が現れる統語構造を持つことを示す。そして、児童用英語教材においては、(2b)のような統語構造は現れるが、(2b')のような統語構造はほとんど現れないことを主張する。





3. 児童用英語教材における出現動詞の意味と文型

本論の調査で用いた児童用英語教材を以下に掲載する。教材の末尾に、本論で用いる略称を（）内に示す。

- ・『英語ノート』 1・2. 2009. 文部科学省 (CD、扱う表現、児童の活動) (『ノート』)
- ・『小学校英語活動テーマブック Let's Have Fun!』 1～6. 2002. 開隆堂 (『Fun』)
- ・『One World Kids』 アントコース・バードコース、アントコース・バードコース 教師用指導書 ティーチーズブック 教育出版 (『OWK』、『OWK 指導書』)
- ・『Junior Columbus 21 Kids』 Book 1・Book 2、CD 1・2. 光村図書 (『JC 21』、『JC 21 CD』)

『英語ノート』に関しては、CD スクリプト内の英語の表現や指導資料内の「扱う表現」に記載された英語表現に加え、指導資料に掲載されている教案内で用いることを想定された英語表現のうち、児童が使用すると思われる「児童の活動」

の部分进行调查した。『Let's Have Fun!』については、児童が使用する2冊のテキストの英語の部分、『One World Kids』については、児童が使用するテキストと教師用指導書の英語をそれぞれ調査した。さらに、『Junior Columbus 21 Kids』については、児童が用いる2冊のテキストとCDスクリプトの英語を調査した。

具体的な調査結果は以下に提示する。第一に、神谷他2010の調査に基づいた、『英語ノート』に出現する動詞の意味タイプ割合の調査結果は、表2のようになる。

表2 『英語ノート』(神谷他(2010:253-256))

意味タイプ	動詞数	%	例
活動動詞	22	56.4%	help、play、run、walk など多数
達成動詞	2	5.1%	clean(他動詞)、make
到達動詞	5	12.8%	come、get、go、grow、 turn
状態動詞	6	15.4%	be、like、have、want、 hope、love
その他の動詞*	4	10.3%	meet、thank、let、see
計	39	100.0%	

*Nice to meet you.に用いられる meet や、Thank you.の thank、Let's ~の let や See you.の see が当てはまる。

『英語ノート』全体の動詞の種類は全部で39となり、活動動詞の動詞数は22、達成動詞の動詞数は2、到達動詞の動詞数は5、状態動詞の動詞数は6、thank youのthankなどその他の動詞数は4となった。なお、be動詞はすべて原型に戻したうえで換算した。全動詞のうち、活動動詞の出現割合が56.4パーセントと半分以上を占め、達成動詞は5.1パーセント、到達動詞は12.8パーセント、状態動詞15.4パーセント、その他の動詞は10.3パーセントとなった。

では、他の児童用英語教材における出現動詞の意味タイプ

割合はどのようになるのだろうか。表3からわかるように『Let's Have Fun!』においては、動詞は89種類出現しており、うち活動動詞の出現数は56で、出現割合は62.9パーセントと全体の6割を超えている。

表3 『Let's Have Fun!』

意味タイプ	動詞数	%	例
活動動詞	56	62.9%	help、play、run、write など多数
達成動詞	8	9.0%	make、bring、send、open など
到達動詞	8	9.0%	come、get、go、turn、fall など
状態動詞	12	13.5%	be、like、have、want、 hope など
その他の動詞*	5	5.6%	meet、thank、let、see、 excuse
計	89	100.0%	

*Nice to meet you.に用いられる meet や、Thank you.の thank、Let's ~の let や See you.の see、Excuse me.の excuse が当てはまる。

また、以下の表4に示されるように、『One World Kids』においては、動詞は73種類出現しており、うち活動動詞の出現数は44で、出現割合は60.3パーセントとなっており、さらに、表5から明らかのように、『Junior Columbus 21 Kids』においては、動詞は132種類出現しており、うち活動動詞の出現数は81で、出現割合は61.4パーセントとなり、これらの教材においても活動動詞の割合が6割を超えている。

表4 『One World Kids』

意味タイプ	動詞数	%	例
活動動詞	44	60.3%	help、play、run、walk など多数
達成動詞	10	13.7%	clean（他動詞）、make、 bring、color など
到達動詞	5	6.8%	come、get、go、sit、stand など
状態動詞	10	13.7%	be、like、have、want、 hope、love、smell など
その他の動詞*	4	5.5%	meet、thank、let、see
計	73	100.0%	

*Nice to meet you.に用いられる meet や、Thank you.の thank、
Let's ~の let や See you.の see が当てはまる。

表5 『Junior Columbus 21 Kids』

意味タイプ	動詞数	%	例
活動動詞	81	61.4%	watch、play、run、walk など多数
達成動詞	21	15.9%	make、give、show、circle、 bring、color など
到達動詞	13	9.8%	come、get、go、turn、 forget、happen など
状態動詞	14	10.6%	be、like、have、want、 know、feel、mean など
その他の動詞*	3	2.3%	thank、let、see
計	132	100.0%	

*Thank you.の thank、Let's ~の let や See you.の see が当ては
まる。

ここで、児童用英語教材に見られる文型について明らかに
しておこう。以下の(3)から(6)の例に見られるように、児童用
英語教材には、第1文型、第2文型、第3文型が非常に豊富
に出現する。

- (3) a. I get up at 7:00. (第1文型)
 b. My name is Ken. (第2文型)
 c. I bought it in Korea. (第3文型)
 (『ノート』)
- (4) a. Let's go to the animal park. (第1文型)
 b. His birthday is December 10. (第2文型)
 c. He has played kendama. (第3文型)
 (『Fun』)
- (5) a. I live in Tokyo. (第1文型)
 b. This is my friend, Hiro. (第2文型)
 c. I have a new video game. (第3文型)
 (『OWK』)
- (6) a. Which one can run the fastest? (第1文型)
 b. This is how we make pancakes. (第2文型)
 c. Let's make pancakes! (第3文型)
 (『JC 21』)

上記の例には、(3a)などのように単純な自動詞と前置詞の組み合わせのみからなる第1文型や、(3b)などのように **be** 動詞から成る最も基本的な第2文型、また、(3c)や(4c)などのように他動詞と主語名詞、目的語名詞から成る第3文型だけではなく、(6b)のように **be** 動詞の補部に新たな第3文型の節が現れる、複文構造から成る第2文型の例も存在する。

それでは、児童用英語教材には第4文型や第5文型は出現しないのだろうか。ここで、『英語ノート』内に出現する動詞の例について考察してみよう。そもそも、表2に示されるように、『英語ノート』には典型的に第4文型に現れる動詞 **give** が見られない。**give** は Vendler 1967 の分類では達成動詞と考えられるが、『英語ノート』に出現する達成動詞は **clear** と **make** の2種のみである。**show** や **send** といった第4文型に頻

繁に現れる動詞も出現しない。また、**make** などの使役動詞を用いた第5文型も存在せず、出現するのは、(7)のように作成動詞を用いた第3文型の用法のみとなる。

- (7) a. I can make an omelet. (『ノート』)
b. Let's make pancakes! (= (6c)) (『JC 21』)

それでは、『英語ノート』以外の他の教材ではどうだろうか。以下の(8)から(10)に示すように、『英語ノート』以外の3種の教材のCDスクリプトや教師用指導書の一部などに **give** や **show** などを用いた第4文型の例が見られる。

- (8) a. I'll give you a piece of paper.
b. Kenta, please show everyone your picture.
(『JC 21 CD』)

- (9) a. I will give you a hint.
b. Tetsuya, please show the class your flag.
c. Show everyone your flag.
((9a, b)は『JC 21 CD』、(9c)は『JC 21』より)

- (10) a. I'll show you some rooms.
b. Please tell me the hour.
c. Now bring me some ham, please.
(『OWK 指導書』)

また、以下の(11)や(12)に示されるように、**call** などの動詞を用いた第5文型の例もCDスクリプトや教師用指導書の一部に見られる。(12)は動詞 **color** を用いた結果構文である。

- (11) a. Then color the kitchen yellow.
b. Let's color the bathroom blue.
c. Cut the markers out.
d. Cut your shape out with scissors.

e. In English we call this a rice cook.

f. In English, we call it rice cake.

(『JC 21 CD』)

(12) Color it blue.

(『OWK 指導書』)

(8)から(12)の例の特徴としては、これらは基本的に全て教室内での実際の言語活動における教師から児童への指示や呼びかけであることが挙げられる。これらの表現は、児童が自分から自発的に発することを想定されているものではない。

さらに、(8)から(10)の例に示されるように、第4文型に出現する動詞は give、show、tell、そして bring に限られることも明らかになった。例の中には send を用いた表現も見られたが、この動詞の出現が確認されたのは歌の中の英文のみである。言い換えると、児童用英語教材に出現する第4文型の間接目的語は大半が受領者 (Recipient) であり、受益者 (Benefactive) である例はほとんど見受けられないことがわかる。間接目的語が受益者である例は、4種のテキストの全例文のデータの中で、『Let Have Fun!』内の buy を用いた第4文型の1例のみである。この1例は、英語で行う「3匹の子豚」の演劇内の台詞として出現している。さらに、第5文型の例は、(11)や(12)に例示されるような color や call が用いられ、補部に形容詞や名詞が現れる SVOC 構文、もしくは、(11c)に例示されるような cut が小辞 out を伴う形式に限定される。

4. 理論的帰結

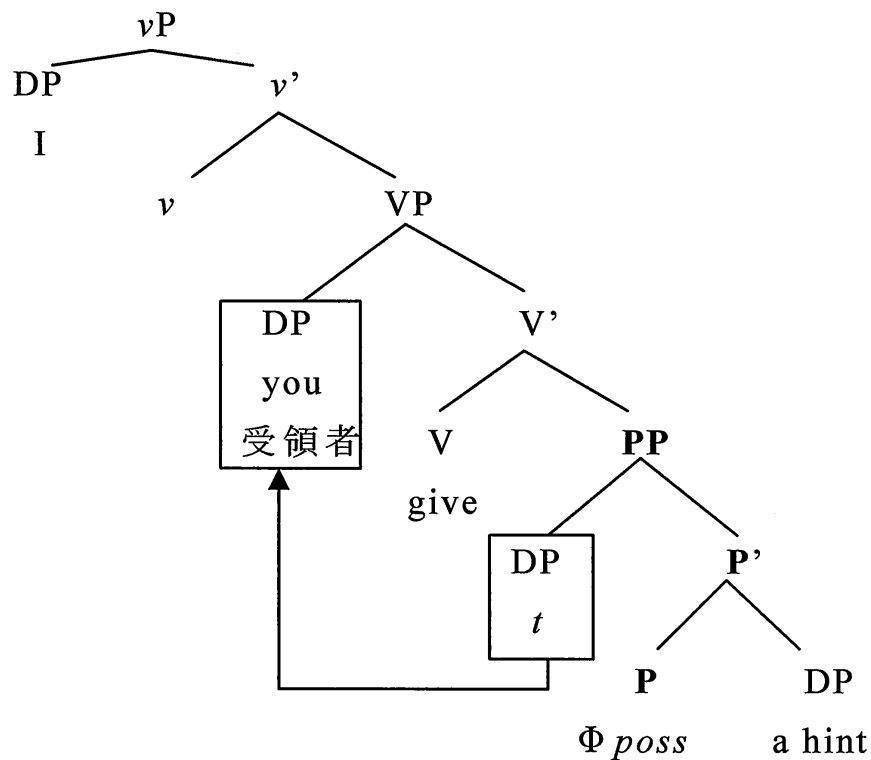
こうした調査結果から明らかになることは、児童用英語教材に出現する動詞には活動動詞が非常に多く、達成動詞などその他のタイプの動詞の割合が少なく、活動動詞以外の意味タイプの動詞はその種類が限られているということである。言い換えると、児童用英語教材に活動動詞が多いというこの結

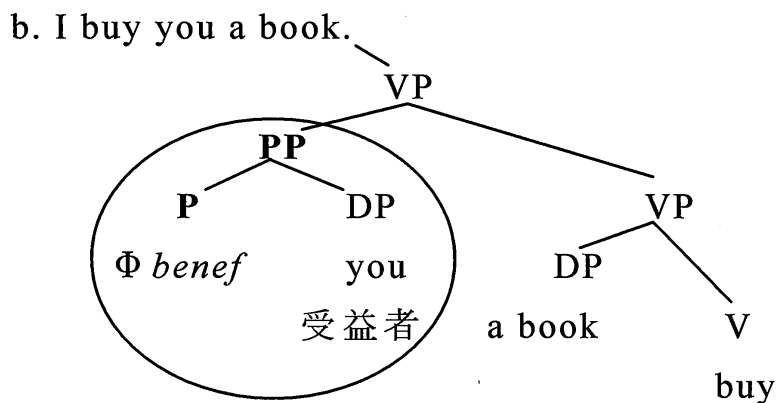
果から、児童用英語教材においては、2節で示した(2a)の LCS の階層構造において上位事象のみの LCS を持つ動詞が、上位事象と下位事象が整った複雑な LCS などを持つ動詞より好まれるということがわかる。

さらに、3節の調査結果からは、児童用英語教材には、2節で示した(2a)の単一の VP から成る統語構造を持つ第1文型、第2文型、第3文型が多く見られるのに対し、(2b)のように2つの VP から成る構造を持つ第4文型や第5文型があまり用いられないことも明らかになった。それでは、いったい、なぜこのように、第4文型や第5文型の例の出現は限定されているのだろうか。

この問題を解決するために、第4文型と第5文型の統語構造について議論する。本論では、第4文型の統語構造として(13)の構造を想定する (Hasebe 2007)。

(13) a. I give you a hint. (cf. (9a)) (cf. Oba 1993)





(13a)は間接目的語が受領者の場合の統語構造、(13b)は間接目的語が受益者の場合の統語構造となる。¹

(13a)の構造は Oba 1993 に基づく。この構造においては、VPの補部に *you* のような間接目的語と *a hint* のような直接目的語の間に生じる所有関係を表わす空の P が投射する PP が現れている。受領者である間接目的語はこの PP の指定部に生起し、直接目的語は P の補部に現れる。後に間接目的語は VP の指定部に移動し、動詞 *give* は vP に移動する。

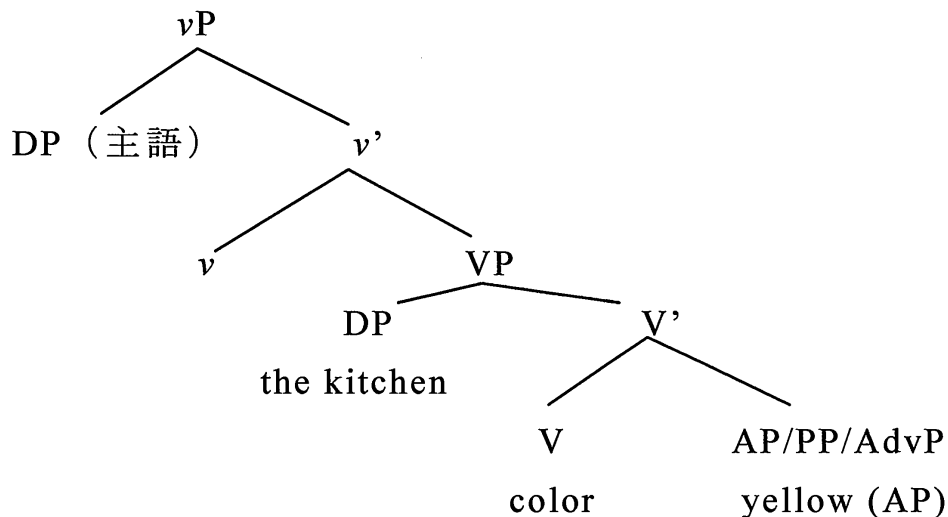
一方、(13b)の構造では、受益者である間接目的語は、VPの補部となる PP 内に現れる、(13a)の受領者である間接目的語とは異なり、VP に付加された PP の主要部に付加されており、結果、(13b)は(13a)よりも複雑な付加構造を形成している。(13b)内の PP は、受益を表す空の主要部 P が投射したものである。既に3節で観察したように、(13a)の統語構造を持つ例は児童用英語教材に見られるが、(13b)の構造を持つ例はほとんど存在しない。なお、(13a)の *give* 同様、(13b)の *buy* も vP に移動する。

¹ 2重目的語構文に対し(13a)と(13b)のように2つの構造を与える理論的もしくは経験的な根拠は、Hasebe 2007 で議論されている。その根拠の1つに、(13a)に相当する構造を持つ2重目的語構文は(ia)のように間接目的語の受動化が可能であるのに対し、(13b)に相当する構造を持つ2重目的語構文は(ib)のように間接目的語の受動化が不可能であるという違いが挙げられる。なお、(13)の統語構造は、Hasebe 2007 において提示された構造の表記を便宜上簡略化したものである。

(i) a. *Mary was given a book.*
 b. **Mary was bought a book.*

続いて、第 5 文型の統語構造について議論する。(14)は Color the kitchen yellow. などのような典型的な結果構文の統語構造だが、結果構文だけではなく小節 (small clause) を補部を選択する他の SVOC 構文も同じ構造を持つと考えられる。

(14) Color the kitchen yellow.

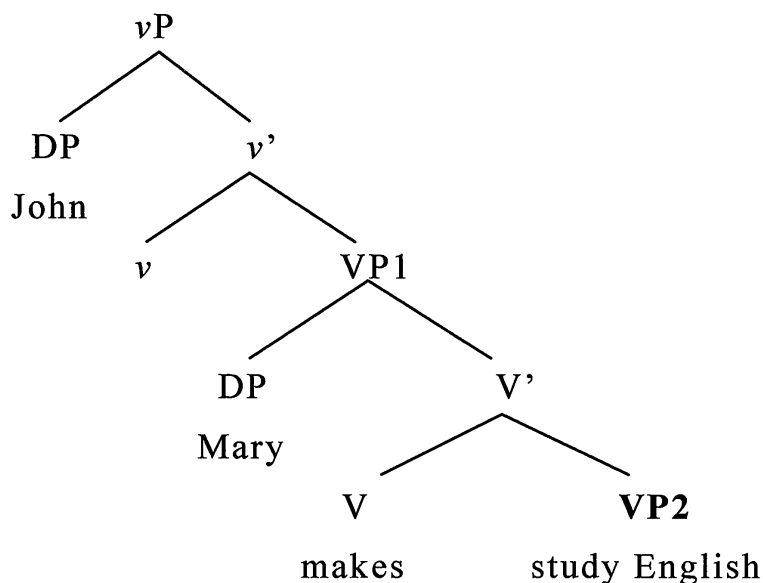


VP の補部には結果状態などを表わす AP や PP、AdvP が生起し、この構造は、上で議論した(13a)の統語構造、つまり、受領者の間接目的語が現れる第 4 文型の統語構造と同じものである。なお、(14)内の color は、(13a)の give などと同様、後に vP へ移動する。

児童用英語教材に全く現れることがない第 5 文型の統語構造は、(15)のような構造である。²

² (15)の統語構造は長谷部 2005 における議論に基づいたものであるが、ここでは便宜上長谷部 2005 内で提示した構造を簡略表記した構造を用いる。

(15) John makes Mary study English.



(15)は *make* などの使役動詞を用いた使役構文の統語構造であり、この構造においては、使役動詞が生起する VP (= VP1) の補部に *study* のような新たな補文動詞が現れる別の VP (= VP2) が出現する (ただし、長谷部 2005 の議論も参照)。動詞が基底生成される VP は 1 つの述語を形成するにあたり中核となる要素であるが、(15)の構造はひとつのまとまった述語の中に、2 つの VP が出現する構造である。つまり、このように複数の動詞が 1 つの節の中に現れる複雑な構造は児童用英語教材には存在しないといえる。(13a)の *give* などと同様に、(15)の *make* も後に **vP** へ移動する。

なお、既に 3 節の (6b) で観察したように、児童用英語教材には複文構造を持つ文も存在するが、その他にも、例えば *I hope that she will come here.* のような複文の例が出現する。こうした複文構造は、(15)の場合とは異なり、以下の (16) のように、強いフェイズ (**strong phase**) を成す 2 つの CP から成り立っており、これらの CP はそれぞれ別個の節を形成するものであると考えることができる。

(16) [_{CP} I [_{VP} hope [_{CP} that she will [_{VP} come here]]]

この構造においては、それぞれの CP の中に現れている VP はそれぞれ 1 つずつであり、よって、こうした複文構造の場合、節という 1 つのまとまった述語の中に複数の動詞が現れているとはみなされない。

これらの調査や考察から、以下の 3 つのことが明らかになる。第一に、児童が自ら発する文には、活動動詞を含む表現が非常に多く現れるということである。すでに(2a)で見たように、基本的には、walk のような活動動詞の LCS は上位事象である ACT という単一のユニットから構成される。また、神谷他 2010 では、『英語ノート』において、What's this? など be 動詞の出現数が非常に多いことが指摘されているが、状態動詞である be 動詞の LCS は、すでに(2a)で見たように、下位事象である STATE という単一のユニットから構成される。こうした単純な LCS を持つ動詞が好まれるのは、ACT や STATE のみの単一ユニットを持つ LCS は、上位事象と下位事象がそろった複雑な LCS に比べ、児童にとって動詞の意味が単純で理解しやすいためであるためであると考えられる。また、これらの動詞の統語構造もまた単一の VP から構成されることが多く、非常に単純であるといえる。

次に、児童が自ら発せず、教師から児童へ呼び掛ける場合のみ使われる文には、間接目的語が受領者である第 4 文型の統語構造である(13a)や、第 5 文型の統語構造である(14)のように単一の V の補部に AP や PP、AdvP が現れる統語構造が現れることがある。これらの文は、先ほど述べた単一の VP から成る構造に比べるとやや複雑なものとなる。

最後に、児童が自ら発せず、児童へ呼び掛ける場合にもほとんど用いられない文の統語構造には、例えば、間接目的語が受益者である二重目的語構造の統語構造である(13b)のよ

うに複雑な付加構造を持つ構造や、使役構文の統語構造である(15)のように、2つのVPによって複数の述語関係が表される構造などが挙げられる。これらの統語構造は、動詞によって表される述語関係が複数であるという点で、先に述べた単一のVの補部にAPなどが現れる構造よりさらに複雑となる。

これら3つのことから、複数のVPを含む統語構造や複雑な付加構造を持つ統語構造を持つ文型に現れる動詞は児童用英語教材には現れず、出現するのは、単一のユニットから成るLCSを持つ動詞や、1つのVPが1つの述語関係を表す単純な統語構造を持つ文型に現れる動詞であると結論付けることができる。また、こうしたことから、外国語活動におけるタスクなどを考案する際に、動詞の意味や動詞が現れる文の構造の単純さなどを考慮する必要があるということがいえる。

5. 結論

本論では、複数の児童英語用教材に出現する動詞や文型について調査した。また、LCSや統語構造といった理論的道具立てを用いてその調査結果を分析し、理論言語学の立場から提言を行った。こうした理論言語学の知見に基づいた調査結果を、実際の外国語活動におけるタスクの実践や教材の製作などにどのように活用することができるかどうかということに関しては、今後の課題としたい。

参考文献

- 中條清美、西垣知佳子、西岡菜穂子、山崎淳史、白井篤義 2006.
「小学校英語活動用テキストの語彙」『日本大学生産工学
部研究報告 B』79-109.
- 長谷部郁子 2005.「日英語の非対格動詞の統語的使役化」 影山
太郎（編）『レキシコンフォーラム No. 1』103-132 ひつじ

書房.

長谷川信子、町田なほみ 2010. 「児童英語の語彙リスト—『KUIS 語彙リスト 500』の開発過程とその全容」 *Scientific Approaches to Language* 9, 149-190.

石川慎一郎 2006. 「KUBEE 1850」神戸大学.
<http://11.ocn.ne.jp/~iskwshin/kubee/html>.

影山太郎 1996. 『動詞意味論』くろしお出版

神谷昇、長谷川信子、町田なほみ、長谷部郁子 2009. 「『英語ノート（試作版）』の語彙の特徴—品詞と意味の観点から—」 *Scientific Approaches to Language* 8, 119-145.

神谷昇、長谷川信子、長谷部郁子、町田なほみ 2010. 「『英語ノート』における品詞割合と動詞の種類」 *Scientific Approaches to Language* 9, 233-255.

Hasebe, Ikuko. 2007. *On the formation of complex predicates and the modularity of morphology*. Doctoral dissertation, Tokyo Metropolitan University.

Oba, Yukio. 1993. "On the Double Object Construction," *English Linguistic* 10, 95-118.

Vendler, Zeno. 1967. *Linguistics in philosophy*. Ithaca, New York: Cornell University Press.

305-8577

つくば市天王台 1-1-1

筑波大学

ikukolcs@yahoo.co.jp